
特集 第24回(通算第52回)全国創作舞踊研究発表会報告

【実践報告】創作舞踊研究発表会における「地域文化の発信」「交流と協同」の様相と学び
～第24回全国創作舞踊研究発表会島根大会を実践の場として～

島根大学 廣兼 志保

1. はじめに

平成16年12月18日(土)～19日(日)の2日間、松江市総合文化センター(プラバホール)において、第24回(通算52回)全国創作舞踊研究発表会が、日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門ならびに島根大学教育学部の主催で開催された。この研究発表会は、全国の教員養成系大学の学生ならびに教員が一堂に会し、教員養成系学生の舞踊に関する資質の向上と相互の親睦を図り、また、保健体育における舞踊教育が当面する課題について研究討議することを通して全国の保健体育指導者の充実と保健体育の発展に寄与することを趣旨としている。

この大会が島根で開催されるのは初めてである。そこで島根の特色を生かし「島根の地域文化の発信」と「交流と協同」をキーコンセプトに大会の内容構成と演出を企画し実践した。本大会のプログラムは本誌第7号32頁から35頁に掲載されているのでご参照いただければ幸いである。本稿では、前述のキーコンセプトに視点をあて、前半部では大会の概要と実施状況について概括し、後半部では大会における学生の交流と協同の様相とそこから得られた学びについて明らかにしたい。

2. 本大会プログラムの概要

2.1. 第1日目

2.1.1. 教員研究発表会

第1日目は、午前中に教員研究発表会が行われた。今回は7名の教員から5題の研究発表と研究討議があり、活発な議論が交わされた。演題と発表者は、以下の通りである。

『創作ダンス授業における学習者の技能評価(2)』(埼玉大学 細川江利子・国際武道大学 佐藤みどり・お茶の水女子大学附属中学校 宮本乙女)

『「南中ソーラン」体験によるイメージ変化』(広島大学 松尾千秋)

『初等体育指導者養成における表現運動の授業－現状と役割－』(鳥取大学 佐分利育代)

『創作舞踊に関する一考察』(白須尋子 東京学芸大学)

『「かかわり学び創造プログラム」の開発とその有効性の検討』(高橋和子 横浜国立大学)

いずれも具体的な教育実践に裏打ちされた研究であり、舞踊教育における日々の教育活動を構想するうえで、多くの示唆に富む内容であった。なお、これらの研究発表の詳細は、本大会の研究紀要に掲載されているので、そちらをご参照いただければ幸いである。

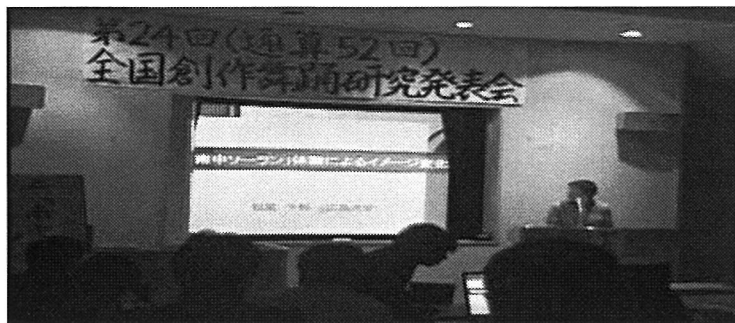


写真1 教員研究発表会の1コマ

2.1.2. 昼食

教員研究発表会に続いて、昼食をとりながら総会が行われた。ここでは「島根の地域文化の発信」として、「食」をとりあげた。そこで、地元業者にコンセプトを伝え、島根特産の冬の食材を盛り合わせた弁当と島根の冬を表現した和菓子¹をそれぞれ考案していただき、参加者に提供した。

2.1.3. ワークショップ①

「動きのコーディネート基礎編～ダイナミックさと繊細さの共存を目指して～」

平山素子(筑波大学)

午後は、昨年度実施されて好評だった、平山素子先生(筑波大学)によるダンスワークショップが実施された。「動きのコーディネート基礎編～ダイナミックさと繊細さの共存を目指して～」をテーマに、8大学から56名の参加者を迎え、コンテンポラリーダンスの基礎技術について研鑽を積んだ。このワークショップは大変人気があり、参加申込数がたちまち定員に達してしまっただけでなく、本大会におけるダンスワークショップの魅力は、各大学から参加する学生達が、普段は授業を受けることのできない他大学の教員から直接指導を受けられることにあるといえる。また、実技の練習を通して参加学生同士の交流もある。このような教育交流は、教大協の研究会としては本大会独自の特色ではないだろうか。このようにワークショップを通して様々な大学の学生が共に他大学の教員から学ぶ場を設けることは、教員養成における教育力向上の観点からも有意義な取り組みといえる。

2.1.4. 学生交流会

夕方からは、参加学生による交流会と、教員懇親会が開催された。学生交流会は、昨年度の筑波大会に参加した島根大学の学生達からの「とてもよい思い出となったので、ぜひ今大会でも実施し、他大学の学生達と交流したい」との願いにより、企画されたものである。学生交流会については、後ほど項を改めて詳述したい。



写真2 ワークショップ① 平山先生と一緒に

2.1.5. 教員懇親会

一方、教員の懇親会も実施された。参加者は、大会会長(島根大学教育学部長)・舞踊教育研究会会員・大会役員(島根大学教育学部保健体育研究室教員)・ワークショップ講師ら27名であった。島根は伝統芸能の盛んな土地柄であり、現在も暮らしの中に伝統芸能が息づいている。そこで、「島根の地域文化の発信」として、県のコンベンションビューローと地元の伝統芸能保存会の協力により、懇親会会場で出雲地方と隠岐地方の民謡と踊り²を保存会の方々に演じていただくこととした。さらに、参加型企画として、伝統芸能保存会の方々を講師に、銭太鼓のミニワークショップを実施した。銭太鼓とは、カラフルな布や飾り糸で飾られた竹筒の内側に五円玉を結びつけたものである。島根の代表的な民謡である安来節の軽快な歌と三味線・鼓

1 松江市は茶道が盛んな土地柄であり、伝統産業として和菓子製造が発達している。今回は、島根の特産品である冬の果実・柚子と、松江のシンボルである冬の花・椿をデザインした和菓子を提供した。

2 島根県は大きく出雲地方・石見地方・隠岐地方に分かれ、それぞれ独自の伝統芸能を伝えている。

の演奏に合わせて2本の銭太鼓を投げたり打ち付けたり回したりと巧みに操り、その華やかな動きや軽快な音を楽しむ。リズム楽器の演奏と踊りが融合したようなものであるといえる。

今回のミニワークショップでは、銭太鼓の基本技をいくつか学び、組み合わせて、保存会の方々による安来節の生演奏に合わせて1曲通して演技することにチャレンジした。両手に持った銭太鼓をバランスよくリズムカルに動かすことはなかなか難しいが、そこはさすがに舞踊教育研究者の集まりであり、参加者は皆とても熱心に集中して練習に取り組んでおられた。また保存会の方々も参加者の熱心さに応えて予定されていた時間を延長し、皆の演技が完成するまで演奏と指導を続けてくださった。この姿はまさに「地域文化の体験による交流」であり、人と人との交流における「歌」と「踊り」の力が改めて感じられた体験であった。

参加者からは、「1曲マスターできて嬉しい」「もっと時間をとってしっかり学んで帰りたい」といった感想が聞かれた。「地元に戻ってからもチャレンジしたい」「家族にも教えてあげたい」と、土産に銭太鼓のセットを買い求めて帰られる方々の姿もあった。



写真3 銭太鼓の練習風景



写真4 参加者全員で

2.2.第2日目

2.2.1.ワークショップ②

「フェルデンクライス・メソッドとパイプオルガンによるからだところの気づきと表現」

高尾 明子(島根大学非常勤講師)

米山 麻美(松江プラバホール専属オルガニスト)

午前中は、フェルデンクライス・メソッド公認指導者の高尾明子先生と、オルガニストの米山麻美さんのコラボレーションによるワークショップが実施され、8大学から55名が参加した。

ワークショップは、高尾先生のリードによりATM(Awareness Through Movement)のレッスンから始まった。ホールの木の床に横たわった姿勢で、からだの微妙な動きの感覚に意識を向けた後、参加者同士ペアを組んで触れ合いながら相手の呼吸を感じとることを体験した。その後、米山さんによるパイプオルガンの即興演奏とともに、周囲の人々と触れ合いながらからだどと心の感じるまま即興的に動くことを試みた。オルガンの音が床・天井・壁などから参加者を包み込むように降ってくる中、舞台の照明の変化が活動場面の展開を誘導し、参加者は互いに融け合っているかのようにゆったりと動いていた。活動の最後には、明るいロビーに出て参加者同士感想を共有し合った。参加者達は以下のように感想を記している。

「ふだん聞くことのできないパイプオルガンの音色。1つの楽器が奏でているとは思えませんでした。音の響きを耳だけでなく、足の裏や頭、手、いろいろな部位から感じました。隣の人とのぬくもり・呼吸の感じがひしひしと伝わってきました。最後、立った時、すごく体が重く不思議な感じがしました。(2年生)」

「ゆったりとした時間と厳かなパイプオルガンの音の中で、"からだ"というものを感ずることができました。(1年生)」

『「ホール全体が楽器で、ヒトでいうお腹だと思って下さい』そう言われてから、オルガンの響きがまるで体の中の響き(胎響?)のように感じられ、とても安心し心地よかったです(3年生)」

「最後のからむやつ、相手の重みや呼吸を感じとることができた。自分だけじゃなく、相手の事を感じる不思議も同時に感じた。(1年生)」

「まわりの空気・空間・仲間、お互いを感じることができました。心も体もほぐれたひとときでした。(2年生)」

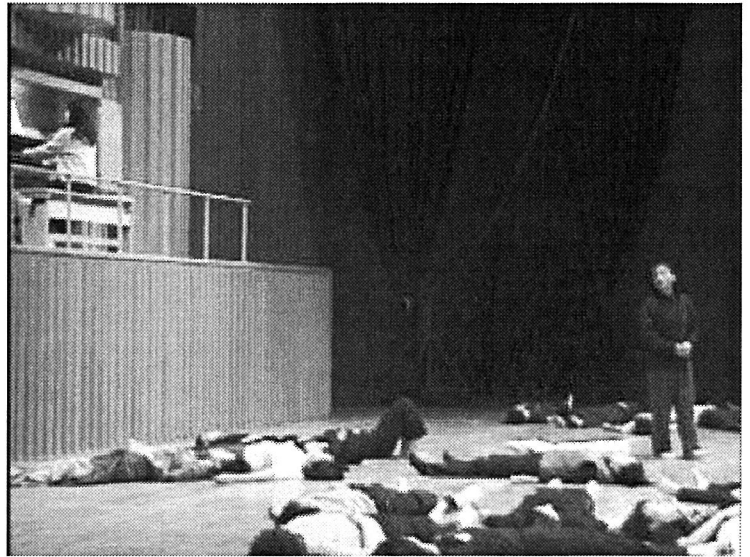


写真5 ワークショップ② 音楽の生演奏とともに

これらの感想から、参加者達がワークショップを通して、自分のからだやこころの様子、そして周囲の人々の様子に意識を向けていたことがわかる。ワークショップでの体験は、参加者にとってからだとこころの気づきを通じた交流体験となっていたといえよう。このワークショップにおける体験が参加者にもたらしたものの詳細については、いずれ機会を改めて考察できればと考える。

2.2.2.舞踊作品発表会

午後は、舞踊作品発表会が実施され、21グループによる作品が上演された。その内訳は、オープニングパフォーマンス、第1部(授業作品)が7作品、第2部(特別プログラム)が3作品、第3部(クラブ作品)が10作品であった。また、この他に、エンディングパフォーマンスとして、島根大学学生がパイプオルガンによるクリスマスソングを演奏した。プログラムの詳細については、本誌第7号34頁に掲載されているのでご参照いただきたい。

(1)オープニングパフォーマンスにおける異分野同士の交流と協同

オープニングパフォーマンス「風・響き・いのち」は、島根大学教育学部で音楽・美術・舞踊を専攻している学生・大学院生によるコラボレーション作品である。参加学生・院生は、互いの専攻を生かして、音楽と舞踊の即興演奏、舞台美術と衣装デザインの制作に取り組み、本発表会でその成果となる作品を発表した。このコラボレーション活動は、同学部の音楽・美術・舞踊担当教員がプロジェクトチームを組み、課外教育活動として実施したものである。本学部では分野を超えた協同制作の機会や現代アート作品の制作に取り組む機会が正規の授業の中にはあまりない。この合同プロジェクトは、このような現状から総合芸術表現教育の可能性を探るべく試みられたものである。合同ワークショップ・合同ディスカッション・合同練習を重ね、5ヶ月間を費やして共同制作作品が完成した。「ホールエントランスに足を踏み入れた瞬間から、舞台へと観客を表現の世界に誘う」「観客を包み込む空気全体を作品に」との統一コンセプトのもと、パフォーマンス作品だけでなく、ホールエントランスに設置したオブジェ作品や発表会プログラム等の印刷物デザインも、プロジェクトの一環として、学生・院生達が制作したも

のである。このプロジェクト活動については、本学部紀要³に活動のプロセスと内容の詳細が掲載されているので、ご参照いただければ幸いである。



写真6 エントランスに設置されたオブジェ
(学生作品)

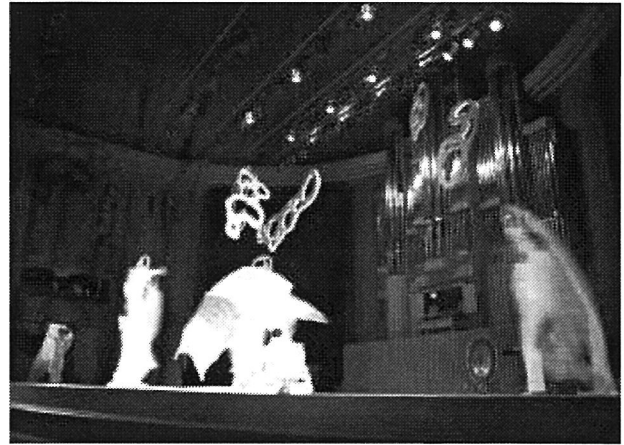


写真7 オープニングパフォーマンス

(2) 特別プログラムにおける地域文化の発信と交流

また、第2部(特別プログラム)では、島根県石見地方の代表的な伝統芸能である石見神楽を伝承する浜田市上府子供神楽団を招待し、代表的な演目である「八岐大蛇(ヤマノオチ)」を演じていただいた。石見地方は伝統的に神楽の盛んな土地であるが、なかでも浜田市では「いわみ子供神楽大会」が毎年開催されており、市内各地区から100名を超える子ども達が参加している。上府子供神楽団では、小学2年生から高校2年生までの子ども達が一緒になって活動しており、楽人・各配役を分担し合い、一つの舞台を創りあげている。地域に根ざす伝統芸能に取り組む異年齢の子ども達が一体となって共に活動する姿を紹介することを通して、伝統と創造、地域と全国とが共存し交流する大会が演出できるのではないかと考え企画した。

子ども達は、早朝から片道4時間かけて会場入りし、厳しい稽古の後、本番では大人顔負けの迫力ある舞と演奏を披露してくれた。発表会当日の子ども達の演技に対して、観客からは「圧巻だった。特にオロチの役を子どもがしていることに圧巻(19歳・学生)」「小さい子ががんばっていたのがすごいわいらしかったです。(21歳・学生)」「感動しました。(50歳・教員)」「さすが本場! 迫力満点!これが子どもの舞ですか? 初めて見せてもらいました。感動を有難う!(74歳・無職)」といった感想が寄せられた。



写真8 上府子供神楽団による「八岐大蛇」の演技

3 廣兼志保・河添達也・石上城行・小谷充『共通体験を核とした総合芸術表現教育の試みー音楽・美術・舞踊のコラボレーションを通してー』島根大学教育学部紀要(教育科学)第39巻 pp.7-18.平成18年2月

2.3.参加学生同士の交流や協同～学生による大会のふりかえりからの考察～

今回、全国創作舞踊研究発表会を企画・運営するにあたり、改めて気づいた本大会の特色がある。それは、研究面だけでなく教育面での取り組みも重視していること、しかも、教育の成果としての学生作品の発表の場を提供するだけでなく、大会そのものを教育の場ととらえ、参加学生同士の交流の場や協同の場を設定してそこから得られる学びを参加学生に提供していることであった。そこで、島根大会でもこの特色を具体化できるよう、参加学生同士の交流や協同の場を企画・実施した。また、学生役員の活動や参加作品の創作過程についても交流と協同という視点からその意味を見直してみた。以下にそれらの企画の概要・学生役員の活動・参加作品の様相について考察したい。

2.3.1.学生交流会における交流と協同

前述のように、第1日目の夕方、各大学のリハーサルや練習が終わった後、学生交流会を実施した。交流会の企画・運営はすべて学生達の手によって行われた。中心となる担当学生4名は、いずれも昨年度の筑波大会で学生交流会に参加していたので、そこでの体験を参考にして、内容の構成と展開を計画した。その概要は以下の通りである。

①各大学の自己紹介

- *大会に参加した14大学が、各校30秒間ずつパフォーマンスをしながら自己紹介をする。
島根大生は、司会・誘導係(各大学担当を予め決めておく)を務める。

②全員ダンス

- *担当学生役員が予め創っておいた簡単なレクリエーションダンスを参加者全員で踊る。パートナーを次々に交代しながら、いろんな人と踊り、交流を深める。

③交流タイム

- *A～Sまでの19グループに別れてテーブルにつき、簡単な夕食を一緒に食べながら交流する。各グループは11～12名で構成し、予め各大学から何名がグループに入るかを割り振り、どのグループも各大学から満遍なくメンバーが構成されるように配慮する。また、島根大生はホスト役として、各グループに1～2名ずつ入り、場を盛り上げる。
- *カラフルな自己紹介カードを各大学の参加者全員に4枚ずつ配り、交換し合う。
- *インスタントカメラやカラーペンを複数個用意し、参加者同士一緒に写真を撮り合い、メッセージなどを書き込んで交換する。

当日は、参加学生が225名(このうち島根大学学生役員は40名参加)と多数だったため、自己紹介パフォーマンスや全員ダンスの会場として予定していた小ホールの中に参加者が入り切らず、急遽場所を移動し、全体ダンスを取り止めるといったアクシデントもあった。

(1)学生交流会における参加学生同士の交流

学生交流会において、普段接する機会のない他大学の学生同士が互いに話し合ったりできたのは、とても新鮮な体験であったようである。学生役員として参加した島根大学保健体育研究室の1年生達(彼らは授業作品の部にも出演している)は次のように感想を記している。

「この大会に出ている他の大学の人と交流できたことが本当によい体験でした。全国の大学で絶対にこの大会がないと出会えなかっただろうと思います。その人たちと、2日間という短い間ではあったが同じ大会に出ているいろいろな話をできて本当に楽しかったです。1日目にあった交流会で、最初は誰も話したことがないのに本当にどうしようと不安に思っていたのですが、最後には、みんな一緒に写真を撮ったり、自己紹介カードを交換したり、本当に楽しかったです。(バレーボール部女子)」「最初『場を盛り上げて!』と言われていたのだが、本当に話せるのかな?と心配していたが、いざ交流会が始まってみると皆イイ人達ばかりで積極的に話しかけてくれ、自分も気楽に話せたおかげもあって、けっこう楽しんでもらえたんじゃないかなと思う。各大学の演し物も特色が出ていてとてもおもしろかったと思う。

なので私はこの交流会は成功だったと思う。(野球部男子)「他の大学の人たちと知り合えたことは大きい。クラブ活動でダンスをしている人たちの話や、他大学の話など普段ふれる事のない話題にもふれた話をするのは知らない事だらけだった。私にはない考えなどを知り、そういう考えもあるのだと感心したりもした。(陸上競技部男子)」

彼らの記した感想からは、事前の不安、自己紹介パフォーマンス・食事・フリートーキングなどを通して次第に気持ちがほぐれていった様子、交流の楽しさ、知らなかった世界にふれた刺激などが読み取れる。この交流会を通して、彼らは肯定的な印象を伴った他者理解という体験を得ることができたといえよう。彼らは、各自の専門種目においてジュニアの頃から選手として活動しているので、大会で他校の学生・生徒達と顔を合わせることは比較的慣れている。しかし、ホスト校としての立場から、他大学の学生を迎え、場を盛り上げるという自覚を持って交流の場に臨むのは、これが初めての経験であった。将来教職に就いたとき、様々な会を企画し運営する立場となるであろう彼らにとって、大会役員としての自覚を持ちながら、各自が任されたテーブルの雰囲気明るく和やかに作り上げていくという経験を積むことは、将来につながる意味ある学びとなったと思われる。また、自校・他校に関わらず共に大会を創り上げる仲間として相手に接する視点は、とすれば競争的な環境の中で活動する機会の多い学生達にとって、これからも大切にしてほしい対人的な姿勢であると考えられる。

(2)学生交流会における学生役員の協同

交流会を企画した担当学生(保健体育研究室3年生女子)は、次のようにふりかえっている。

「今回の交流会は、主にダンス部の学生(10名)が担当で、その中でも保健体育研究室の4名が中心となって企画・運営を行いました。交流会についての、グループ分け・流れについてのプリントを作成し、1日目の学生代表者会議で配布して内容を説明しました。食事の時は、チェキを使ったり、音楽をかけたりしました。自己紹介カードを1人4枚配りました。これは、食事の時に交換するためのものでした。結構、交換していた人もいたので、結構いい案だと思いました。交流会当日は、とてもバタバタしており、思わぬトラブルがあるので、担当者全員が交流会の流れを把握しておく必要があると思います。どんなことを行うにしても、たくさんの人の協力と適切な役割分担が必要であることが分かりました。そのためには、まず、中心となる人がしっかり流れを把握すること、役割分担をすることが大切だと思います。今回、大体の計画はたてていましたが、実際に交流会を運営してみると、いろんな細かな問題があったので、実際にどのような感じになるか前もって1度やってみるべきだと思いました。学生交流会は、他大学の学生と交流できるとても素晴らしい機会だと思います。大会の一部として心に残るような交流会にしたいと思い計画・運営を行いました。次回の教大協大会でも、是非、学生交流会を取り入れて欲しいと思います。楽しみにしています。」

この学生は、担当係のメンバーと共に相談しながら、「大会の一部として心に残るような交流会に」なるよう、初対面同士が互いに知り合い・打ち解け合うことを促すプロセスをイメージしつつ活動を構成し、時間配分を考えた。そしてそれらの活動に応じてスペースや位置どりを考え、交流を促す小道具をどのように設定し使用するか、ホスト役の大会役員をどのように配置し役割を割り振るかなどについても工夫した。企画・運営の雛形は、筑波大会での学生交流会の様子を思い出すことで容易に得られた。その雛形を島根大会での開催条件に合わせてアレンジすることにより、学生達は事前の計画を比較的スムーズに構想することができた。そのうえで、島根大会において「たくさんの人の協力と適切な役割分担」を得て、学生交流会は具体化できたのである。大会への継続的な参加による経験の積み重ねが実現できたことであるといえる。

運営にあたっては、前述のように、せっかく計画した活動を一部取り止めなくてはならなくなったり、その他、事前に予想できなかった様々な細かい不備などもあったようだが、担当学生は、事後のふりか

えりの中でその改善策を考え、実施上の留意事項をまとめている⁴。このような計画－実行－反省－考察の一連のプロセスの中で、学生役員達は互いに自分の役割を意識しながら協力し合ってプロジェクトを実現させた。教員を目指す学生達にとって、このように協同し合いながら、あるコンセプトを具体化するために時間・人・物などをマネジメントしたり場の雰囲気を創出したりする経験は、将来につながる学びの機会となったといえよう。

2.3.2. 舞踊作品に対する参加学生同士のアドバイス

本大会では、これまでも他大学のダンス作品を見学し、参加学生同士がアドバイスし合うという取り組みを続けてきた。そこで、島根大会でも、リハーサルや練習時間のスケジュールを考慮しながら参加大学同士ペアグループを設定し、それぞれ作品のアドバイスをし合う機会を設けた。その際、ハート型に切り抜いたメッセージカードを各大学に配布し、リハーサルでの作品上演を見て、カードにアドバイスを記入してもらった。記入したカードは、参加学生控え室(参加学生が待機する大会議室。学生交流会の会場にもなった)に設置した伝言板(ホワイトボード)に随時貼っていくこととし、皆が互いにメッセージカードを見合うことができるようにした。

参加学生控え室には、カラフルな色鉛筆やカラーペンを置き、自由に使えるようにしたところ、明るい色遣いのカラフルなメッセージカードができあがり、白い伝言板にどんどん貼られていった。中には笑顔・こぶし・星マーク・ハートマークなどの絵文字を添えたメッセージカードも多くあり、言葉だけでなく様々な視覚的工夫によってもアドバイスとともに気持ちを伝えようとしている参加学生達の姿がうかがえた。メッセージカードに書かれたコメントをいくつか以下に紹介する。

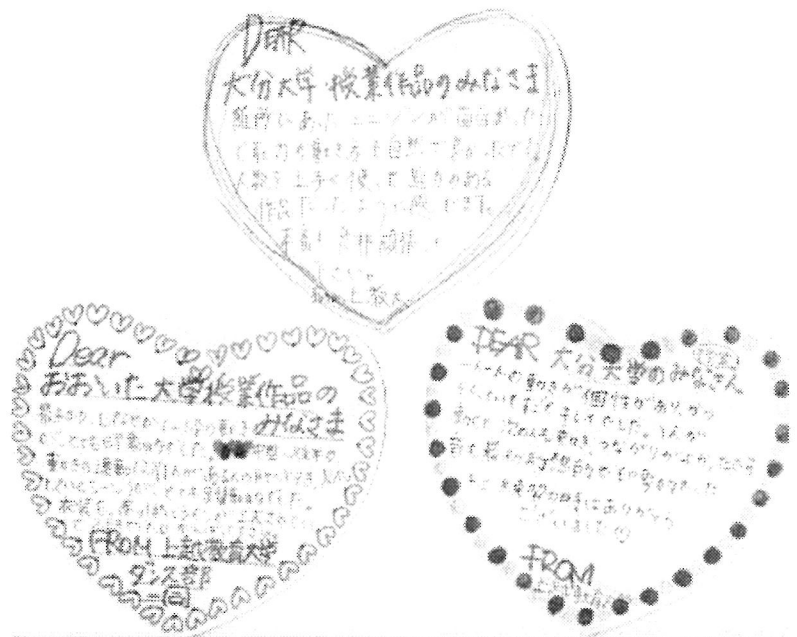


写真9 ペア大学からのメッセージカード

「A大学さん江 印象的なフリが何度も出てきて、とてもよかったです。ボディクラブが情熱的雰囲気をかもしだしていました。熱かったです。 B大学より」「C大学さんへ 1人1人の動きがおもしろくてとても印象的でした。音に話し声があったので、テーマがよく伝わってきました。動きが大きくて見習いたいデス ^v^- 明日も頑張りましょうね D大学より」「E大学さん 黒いマントの人だけで踊るシーンが迫力があって好きです。色つき衣装の2人と踊りの質が違うともっと良かったです。でも、2人をとりまくという構成がつまぬかれて見やすかったです。舞台上では自信をもって前を向いて踊った方が上手に見えますよ♪ F大学」「G大学さんへ “動”と“静”の動きがとてもきれく使い分けられていたのがすごく良かった。全体的に動きがスピーディでキレイがあったように思う。明日は共に笑顔で頑張りましょう。 H大学より」

4 本稿では割愛したが、この学生は学生交流会実施上の問題点と改善策をまとめて「次回大会の学生役員への申し送り事項」を報告している。

これらのカードの記述からは、学生達の、「ペアとなる大学の作品が表現したいテーマを読み取り、相手が表現したいことに添って構成や演舞の特徴をつかんだうえで、よい動きや工夫点を相手にフィードバックしようとする姿勢」「相手の作品の課題をみつけ、肯定的・支援的な表現によってアドバイスをしようとする姿勢」「同じ大会に参加する同士としての立場から相手を励まそうとする姿勢」が読み取れる。将来指導者的役割に就こうとする者にふさわしい姿勢であるといえる。

2.3.3.大会運営における学生役員達の協同

本大会では、島根大学の学生達 40 名が役員として様々な役割を分担し、大会を運営した。役員として運営に携わったのは、授業作品に出演する健康・スポーツ教育講座 1 年生・クラブ作品に出演するダンス部 1~4 年生・保健体育研究室廣兼ゼミ 3~4 年生であった。これらの学生役員達は全員が大会の運営に携わるのは初めてであったため、役割分担・仕事内容や手順の把握・事前の人間関係づくりを入念に行い、仕事に対する学生達の不安や迷いを軽減するように心がけた。

3~4 年生を集めた第 1 回目の学生役員会時に、大会の概要・業務の概要とスケジュールを示したプリントを配布し、一人ひとりの業務分担を決めた。3~4 年生は全員各係のチーフを分担した。この際、仕事で困った時に必ず相談相手がいるよう同級生同士でペアを組み、その下に係メンバーとして下級生を配置して、役割分担を工夫した。

本大会では、学生役員の中には社会人経験者はおらず、大会当日の仕事の流れを具体的にイメージしリードできる者はいなかった。そこで、まず、前年度主幹校である筑波大学から送っていただいた大会資料をもとに各係のチーフが時間・場所・仕事の内容・人員配置・必要物品などを考えて表にまとめた「仕事の台本」を作成し、係メンバー全員に配布することとした。このことにより、係メンバー全員が仕事の内容や手順を把握でき、チーフ学生が後輩を的確に指導できるようになった。さらに、仕事の簡単なシミュレーションをしながら学生役員全員で事前に会場の下見をしたことで、具体的な仕事のイメージをもって大会の運営に臨むことができるようになった。

事前の人間関係づくりとしては、授業作品の中間発表会や大会直前のダンス練習の時間などを利用して 1 年生と 3~4 年生を出会わせ、先輩から後輩へ作品のアドバイスや励ましの言葉を贈ったり、各係のチーフ紹介をしたりする機会を設けた。このようにお互いが顔を合わせ、言葉を交わしていくことで、普段はそれほど交流のない異学年の学生の間次第に連帯感と信頼が生まれていった。

役員の仕事を経験した 1 年生達は、次のように感想を記している。

「私たちは 2 日間スタッフとしてお手伝いをした。他大学の先生やお客さんとたくさん関わって、うちにだんだんと人との関わり方も分かってきたし、楽しくなってきました。ダンス発表会のすべてが終了して他大学の人たちからお礼を言われた時は本当にうれしかったし、すごい達成感がありました。(テニス部女子)」「スタッフとして発表会を裏で支えて、スムーズに行えるように努力した事も良い体験になった。スタッフという、表には見えない仕事をする事により、その大変さがわかり、今まで私がどれだけ多くの人にお世話になってきたかがわかった。日常生活では体験できないような体験をする事により、このような発表会の運営する側の大変さを知る事が出来た。これも、この発表会に出場してよかったと思える要因の一つである。(陸上競技部男子)」「役員をすることによって、裏の仕事の大変さを知ることができました。大会があるということは、必ず、その裏でサポートしてくれる人がいるんだなあってことに気づくことができました。交流会の準備などとても忙しくて、クタクタになりましたが、他の大学の学生さんに、『ありがとうございます』『とても楽しかったです』など、お礼の言葉をかけてもらおうと、素直にうれしかったです。当日の楽屋の仕事では、踊る前の人たちと、踊ったあとの人たちとの表情の違いに気付くことができました。踊る前の人たちは、ものすごく引きしまった表情をし、緊張感にみちていて、やるぞっていう気持ち、こっちにまで伝わってくるような感じでした。踊り終わった人たちは、息をはずましていて、やったぞっていう、達成感に

みちた表情をしていて、すがすがしさが伝わってくるような感じでした。私は、ダンスの大会を通して、さまざまな人に出会い、いろんな経験もでき、これからの人生に生かせるところは生かしていこうと思いました。(野球部男子)

前述したように、彼らは各自の専門種目において、ジュニアの頃から様々な大会に選手として参加した経験を持っている。彼らは、本大会での役員の仕事を体験することで、大会運営を支える裏の仕事の大変さを知り、大会を裏でサポートしてくれる人の存在や、今まで自分が多くの人の世話になってきたことを実感をもってわかったのである。この気づきは、支えてもらう立場から支える立場への意識の転換へとつながっていくものであるといえよう。

また、役員の仕事を通して、参加者の表情の違いに気づくなど他者を共感的に観ることができるようになったり、人との関わり方がだんだんわかってくるようになるなど、人との交流からも得るものがあったようである。一方、

「私たちは役員の仕事もやったのですが、先輩方のように動けなくて…すごく反省しました。先輩方やたくさんの人たちの働きがあったからこそこの大会がイイものになったと思います。本当に感謝です。(バレーボール部女子)」「自分たちのオリジナルのダンスを何百人の前で発表したり、発表会を運営していくことで、人とのつながりの大切さを感じました。1人1人がバラバラでは成り立たないし、1人ががんばっても成り立たないので、協力することの大切さを改めて感じました。また、先輩方にとっておられた態度に感心し、自分もそのようにしていかなければならないなど、自分に足りない部分を見つけることができ、今後のことに生かせるようにしていきたいです。(テニス部男子)」といった感想もあった。彼らがそのようなふりかえりを形成するにあたって、ロールモデルとしての上級生達の姿は大きな役割を果たしていたといえる。チーフとして係メンバーの下級生を指導しながら仕事を遂行していった保健体育研究室3年生は、次のように感想を記している。

「私は、作品出演とスタッフの両方を掛け持ちしました。12月は頭の中が教大協の事ばかりで、他のことが手につかない毎日でした。しかし、卒論前の先輩方や、ゼミ生が、(仕事を)がんばっているのを見て、私も心に残る大会にしようと思い、がんばるぞという気になりました。この、大会を終えて一番実感したのは、人と協力することが大切だということです。『先輩、何をしたらよいでしょうか』という後輩の声や、ゼミ生と何回も何回もスタッフのシフトを練り直したことなど、いまでも心に残っています。また、自分の能力の面でも、成長したことがたくさんあります。状況を判断して適切な指示をだすこと、(仕事の台本や資料などの作成のため)ワードの使い方が少し上手になったこと、いろんな価値観を持てたことなどです。大会運営は本当に大変でしたが、その分、他大学の学生からの『おつかれ』の一言の重みや、裏で働くことの大変さなどを体験することができ、様々なことがこれからの私の糧になりました。(ダンス部女子)」

これらの感想からうかがわれるのは、学生役員達それぞれが「いい大会にしよう」という気持ちを共有し合いそれを動機として、互いが仕事に取り組む姿を励みに自分も仕事に取り組んでいった様子である。大会当日の役員控室の中でも、上級生が仕事をしているのを見て一緒に手伝おうとする下級生の姿や、忙しそうな同級生とすすんで仕事を交代している学生の姿、急用が生じて「誰か!」と声があがった時にすぐさま「はい」と進み出る下級生の姿などがしばしば見られた。それらは何か特別な指導によってできた行動ではなく、学生役員のミーティングを重ねる中で「皆でよい大会にしよう」との共通の目標に向かう姿勢ができあがり、互いが場の雰囲気を感じ取って状況に応じた行動を自然にとれるようになっていった結果であるといえる。だからこそ、素直に「協力の大切さ」「人とのつながりの大切さ」といった言葉が感想の中に現れたのではないかと思われる。

2.3.4. 授業作品の創作・出演における学生の協同

本学部では、保健体育専攻生を対象としたダンス実技の授業は、1年次に半期1単位(男女共必修)が開講されているのみである。そこで、前期にダンス実技を履修した1年生全員(19名、うち当日参加したのは18名)が大会役員を兼ねて全国大会に参加することとなった。

参加にあたっては、週に1回特別授業扱いでダンスの創作と練習を実施した。実施回数は計8回・16時間(他にオリエンテーション1時間と会場下見1時間)であった。実際には、この他にも学生達はグループごとに自主的に集まって練習をしていた。

創作にあたっては、ダンスのタイトルを「Cheers!」とし、まず Cheers!という言葉から「応援」「乾杯」などいろんなシーンや言葉を連想し、ダンスのイメージをふくらませていった。そして、学年をA～Cの3チームに分け、各チームそれぞれテーマに合わせて1分間程度の音楽や動きを構成することとした。チーム編成は、学生から男女混合がいいという声があがったので、女子2名+男子4または5名の、小計6または7人ずつのチームとなった。各チームが考えたテーマは、それぞれ「チアリーダー」「スポーツいろいろ」「合コン」であった。各チームが創ったダンスをオムニバスのつなぎ、最後に全員でユニゾンの踊りを踊ってフィナーレとする構成にした。各チームが主役になって踊る場面では、その他のメンバーは舞台後方にまわって、踊っている仲間達を応援することとした。動きや構成はシンプルで、全体的に明るくリズムカルな雰囲気の商品となった。

この学年にはダンスを専門にする学生はいない。高校の学園祭などでのダンス経験がある学生もいるが、大学生になってからは、ダンスの舞台に出演するのは、全員、本大会が初めての経験であった。本大会に参加しようと学生達に声をかけたとき、学生達の反応は「面白そう、やってみたい」「本当にできるの?大丈夫?」という気持ちが混じりあったものであった。学生達にとって「全国大会出場」という言葉は、長く厳しい競争を勝ち抜いて初めて得られるものというイメージがある。彼らはその困難さをそれぞれの部活動での経験を通してよく知っている。一方、自分達はダンスに関して全くの初心者集まりだという自覚もある。「(全国大会への参加は)あまりに突飛な話でまったく実感が沸きませんでした。(柔道部男子)」「最初のころのダンスの講義では、自分たちがあんな大舞台で踊るとはなかなか想像できなくて、練習はどこか集中力が欠けていたと思う。どんな風なイメージで踊るのかも決めていなかったし、誰も自分からダンスを考えたりしようとはしていなかった。(バスケットボール部男子)」「たった二ヶ月、しかも週一回の授業で作あげたダンスを発表していいのかなと思うこともありました。(テニス部男子)」このような状況の中で創作活動は出発した。作品の創作から本番での演技に至る過程で、学生達は相互に関わり合いながら、試行錯誤を重ね、様々なことを学んでいった。

前述のように、最初はなかなか創作が進まず、アイデアがまとまるのに時間がかかった。指導教員(廣兼)は学生が「先生～」と相談に来るたび、その都度ヒントを出したが、具体的な動きは学生達が考え、自分達で決めた。最終決定権は学生達自身にある、というのが暗黙の了解事項だった。教員は学生達のそばにいて練習の環境を整えたり、ふりかえりカードなどから予め把握しておいた各グループの状況に応じて、学生達の活動の様子を見ながら声をかけたりしていた。パズルのピースが埋まっていくように、少しずつ何が決まり始めていくと、それにしたがって次第にいろんな事柄が決まっていき、加速度的に作品創作は進んでいった。学生達は自分達でその日の練習内容を決め、実行した。自分達の演技をいいものにしたい、という雰囲気が満ちていた。練習は次第に密度が濃くなっていった。学生達は互いに得意な動き・苦手な動きを教え合い、何度も動きの練習を繰り返していた。以下、学生達の感想から、練習から本番に至る様子をたどっていきたい。

「今回全国創作舞踊研究発表会が島根県であるということで、私達も授業作品の部に参加してもらった。ダンスのことなんか何も知らない人がほとんどの体研1回生全員での作品を創ることとなった。(中略)最初この大会に参加すると聞いたとき、マジかよっ?!というのがほんとのところでした。作品を創っていくことはとても難しいことでした。意見をいわない、集中しないという状況がありま

した。しかしここが私が得た大きなものでもあるのですが、徐々にみんなが一つになりだしたのです。(陸上競技部男子)」

「発表会が近づくとつれて、みんなのやる気があがっていくのがわかった。ダンスのバリエーションを増やすために、一人ひとりが考えたものをみんなに伝え合ったりした。(中略)それからみんな徐々にいい動きのアイデアが出てきて、とてもまとまりのあるダンスができあがったと思う。でも途中には班の中でのダンスに対する取り組み方や、考え方の違いなどにより、けんかみたいになりかけたこともあったけど、なんだかんだでみんなの気持ちはひとつになっていたと思う。(バスケットボール部男子)」

「一番心配だったのはみんなが積極的に作品作りに参加してくれるのか、という事でした。積極的な人とそうでない人とできたら、もめるのではないかとか、これで亀裂が入って大学生活が楽しくなくなったらどうしようとか考えてました。練習をはじめた頃はやはり実感が全くわかなくてみんなもとまどってばかりでした。曲選びをはじめ、ふりつけ、隊形などグループの人数や技能にあわせた動きを考えるのはむずかしかったです。でもみんながそれぞれイメージを持っていたし、それを意見として出しあえたので、それぞれの意見をとり入れたダンスをつくる事ができました。練習の時、足をけがしてしまって、どうしようかと思いました。私とぶ所は、チームの一番の見せ場だったので、はずしたくなかったし、ダンスをかえたあと練習する時間が保障されてなかったので、チームでどうするか本当に考えました。(中略)他のチームの友達や、部活の友達にもすごく心配してもらって、みんなのやさしさを感じました。けがした日の夜はたくさんの友達が『足大丈夫?』とメールを送ってきてくれました。本当にうれしかったです。発表会で披露したのはダンスの演技だけですが、このダンスの創作を通じてみんなのやさしさや団結力のすごさ、達成感などたくさんの事を知る事ができました。(陸上競技部女子)」

「私はダンスをしたことがなく、ダンスを初めてしたのは大学の授業でした。チームに分かれてのダンス作りでは自分の意見が持てず、どんな動きをしたいとか、ここの動きをどうしようかときかれてもどうしたら良いかわからずみなに任せきりでした。全員で行うダンスもなかなか覚えることができせんでしたが、放課後に仲間と集まって繰り返し練習しどうにか覚え、少しでも体全体を使って動けるよう努力しました。練習を重ねるにつれ、練習中にここはこうしたほうが良いと自然に思えるようになり、みんなに自分の意見を言えるようになりました。がんばって練習したので自信がついたし、踊ることの楽しさを知りました。本番前日、他の大学のリハーサルを見ている時ほんとにすごいと思いました。でも自分達は他大学にはない自由さと元気のあるダンスをしよう決めていました。本番前は普段自分の経験したことのないものすごい緊張感を感じました。しかし本番が始まるとふっきって普段の練習通りできたと思います。(中略)なによりみんなと同じ目標にむかってがんばれたこと、ダンスの面白さを分かれた事がよかったです。(剣道部男子)」

「私は今回このような会に参加することができ、本当にいい経験ができたと思います。本当の事をいうと最初は、あまり出たくないな、イヤだなと思っていました。しかし、今は、本当に参加することができてよかった、本当に楽しかったと思っています。みんなで作って踊ったダンス。本当にみんなで力を合わせてやりとげたという達成感などもあります。それにみんなの団結力、絆なども深まったように感じます。この大会に出るために木曜の5コマにみんなが集まり、どんなダンスにするか、何もない0から始めたダンスが、みんなの前で発表できるような状態にできたということで、みんなに感謝したいです。ダンスの技術などを見ると、他の大学に比べて、はるかに劣っていると感じましたが、私達が一番楽しく踊れたという自信はあります。本当に楽しかったです。(バレーボール部女子)」

「今回の発表会は、前期の授業で学んだことを披露するいい機会になったと思いました。最初は曲もなかなか決まらず、このままのペースで間に合うのだろうかと思いましたが各チームで意見を出し

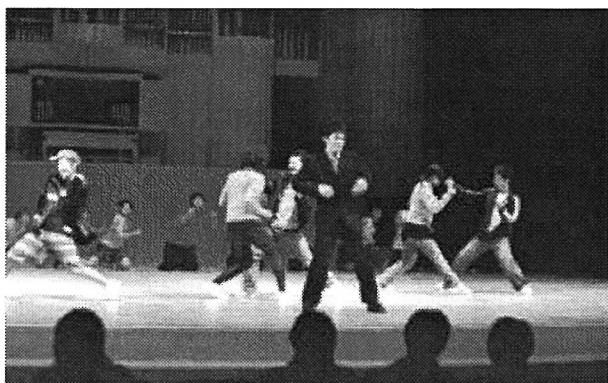


写真10 学生作品“Cheers!”より
合コンのシーン

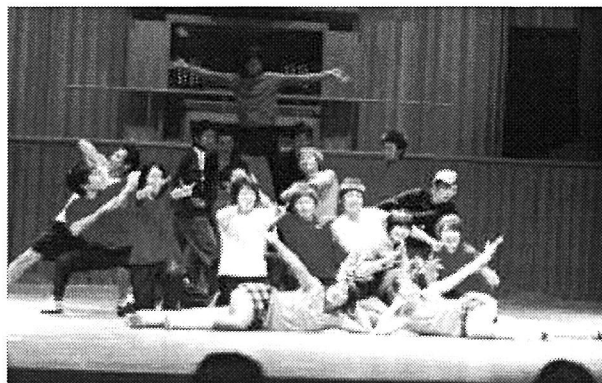


写真11 学生作品“Cheers!”のラストシーン

できあがった作品には、実は指導教員(廣兼)は手を加えていない。指導教員はダンスのタイトル・作品の大まかな流れ・ユニゾン時の音楽を創作時に提示し、「発表会の一番最初に演じる作品なので、ホスト校らしく『皆さんようこそ』と迎える明るく元気な作品にしよう」と作品の方向付けをしたのみである。音楽・動き・衣装など全て学生が考え、創った。そこに自分達の作品に対する愛着が生まれた。構成面・技術面では、学生自身も自覚しているように、「見せる」ダンス作品としてはまだまだ未熟である。しかし学生達の感想文からは「他大学にはない自由さと元気のあるダンス(自分達が考えた自分達のアピールポイント)」「自分達ができる最高のダンス」「自分達が一番楽しく踊れたという自信」を自ら目指し実現させたことに対する達成感と満足感が読み取れる。

このような成果は、仲間同士の関わりの中から生まれたものであるといえる。学生達の感想文にもあったように、2ヶ月間の協同創作の中には、不安・焦り・葛藤・意見のぶつかり合いなどもあった。しかし、彼らが徐々に気持ちを一つにしながらか完成を迎えることができたのは、「作品のテーマや目指す方向がわかりやすく、学生達自身の雰囲気とも合っていたこと」「音楽が明るくりズミカルでのりやすかったこと」「作品の中に『誰でもできる楽しい動き』『頑張れば練習すればマスターできるカッコいい動き』『皆の動きが揃っていても面白く見える場面』『皆の動きが揃っていることでカッコよく見える場面』など、個が生きる場所と皆が力と呼吸を合わせる場所がバランスよく入っていたこと」「練習中の仲間のいろいろな面を見て触発される部分があったこと」「できない動きができるようになるまで一緒に練習する仲間があったこと」「できるようになることで自信がついたこと」「日頃から部活動などを通して努力と成果の関係をよく知っていること」「精一杯やろうという気持ちがあったこと」などの要因があったからではないかと思われる。

余談であるが、発表会当日には、保健体育研究室の2~4年生達が自主的に参観にやって来た。彼らは、同級生や後輩達がダンスの練習に取り組んでいることを知っていて、応援に来たのである。彼らは発表会の舞台を見て、自分達もダンスの大会に出たいと口々に言っていた。翌17年度、彼ら(17年度の3年生)は自力でその願いをかなえた。彼らはダンス大会の情報を自分達で探し、あるテレビ番組が主催するダンスコンテストをみつけた。その全国大会出場を目指して、学年でチームを組んで中国・四国地区予選に出場したのである。彼らは教育実習の後、授業と部活動の合間をぬって週3~4回2ヶ月間の練習を自主的にこなした。結果として全国大会への出場はかなわなかったが、中国・四国地区から推薦される全国大会出場候補4チームのうちの1チームに選ばれた。このことは、「自分達のようなダンスの素人でも頑張れば認めてもらえる」との大きな自信につながった。学生達の前向きなエネルギーとそのひろがりを感じさせるエピソードである。

2.3.5. 「交流と協同」体験からの学び

「交流と協同」という視点から、学生達の感想文やコメントをもとに本大会の様相をふりかえってきた。本大会のプログラムには、大会に至る準備段階から大会当日に至るまで、様々な場面で学生同士の交流や協同が生まれる活動が存在した。既述の事柄以外にも、会場の設営・片づけを鳥取大学からの参加学生達と島根大学の学生役員とが一緒にしたりもした。これらの交流体験・協同体験から学生達が学んだことは、「今この場だからこそ出会えた人と親しむ楽しさ」「周囲の人々の様々な面の発見とそこから触発されるもの」「仲間と協力し合いながら一つのことを創り上げていく達成感」「同じ目標を共有する集まりとしての連帯感や励まし」「場を支える役割の実感と感謝」など多くのものがあった。それらの学びは、活動の開始からふりかえりに至る一連の過程で、体験に伴う感情とともに学生達のこころの中から自然に生まれてきたものであった。

大会から1年が過ぎ、学生達はさらに成長への階段を1歩ずつ歩んでいる。大会を通して得られた様々な感情や学びは、今や彼らのこころの奥深くに沈潜していることであろう。これらの感情や学びが彼らの中でゆっくりと醸造されていくこと、そして学生達の今後の生涯の中で様々な経験と結びついてさらに洗練され自分や周囲の人々に喜びをもたらす力へと育っていくことを心から願わないではいけない。

3. おわりに

これまでみてきたように、「島根の地域文化の発信」と「交流と協同」をキーコンセプトに企画・運営してきた本大会であった。これらのキーコンセプトから展開させたイメージや願いがどこまで総体として大会のプログラムや演出に具現化できただろうか、参加者の方々や観客の方々が実際の場の空気の中でどのように感じてくださっただろうか、この会のコンセプトは参加者や観客に対してどれだけの貢献ができたのだろうか、との思いも残る。客観的な評価をいただければ幸いである。

一方、このような研究発表会を具体化するにあたっては、様々な手続きと作業が必要であった。そのような中、前回大会役員の筑波大学の先生方や中国地区の先生方を始め、舞踊研究会の先生方には大変お世話になり、温かく励ましていただいた。この場をお借りして再度感謝を申し上げたい。そして地域・学部・講座の尽力なくしては、本大会は実現しなかった。まさに「協力の大切さ」「人とのつながりの大切さ」が実感される。

また、このような形で実践報告をまとめ、大会の意味を改めて考える機会を与えてくださった『舞踊教育学研究』編集委員会の先生方にも感謝を申し上げたい。

関係者の皆様、本当にありがとうございました。

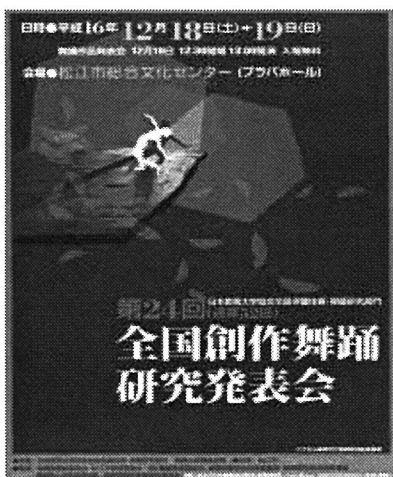


写真12 発表会チラシデザイン
(島根大学学生作品)



写真13 会場となった松江市総合文化センター

参考文献・参考資料一覧

- 廣兼志保『第24回全国創作舞踊研究発表会報告』「舞踊教育学研究」第7号 pp.32-35.平成17年3月.
- 廣兼志保編「日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門 第24回(通算52回)全国創作舞踊研究発表会 研究紀要」平成16年12月.
- 廣兼志保・河添達也・石上城行・小谷充『共通体験を核とした総合芸術表現教育の試みー音楽・美術・舞踊のコラボレーションを通してー』島根大学教育学部紀要(教育科学)第39巻 pp.7-18.平成18年2月.
- いわみ子供神楽フェスタ実行委員会編「いわみ子供神楽フェスタ2004」平成16年6月.